

## ザ・ボイスメール 6月 ニカラグアから届いた夢

先頃、中米のニカラグアから懐かしくも嬉しいメールが入りました。「今年は東洋医学を専攻した 25 人の学生が卒業した」というニカラグア東洋医学大学の学長兼理事長を務める友人の八巻晴夫（やまき はるお）さんからの便りでした。メールには現地のネットで紹介されたスペイン語の記事も添付されていました。とても感動的な励まされる内容だったので、その記事に私の知っている内容を加えご紹介します。

ネットで紹介された記事の 1 ページ目には概要、次のように書かれています。

——25 人が卒業の厳かに挙行された式で学長は心をこめて祝福した。「1000 匹の羊よりも 1 匹の獅子たれ。この大学にいる一人一人は獅子です」。加えて「現在この国には多くの大学がありますが、私たちの大学は国内で最も困っている人々を支援していくのが主目的の大学です」と。

八巻氏はニカラグア駐在の日本大使や J I C A の所長にあいさつ、ニカラグア政府や各種機関、病院や保健所の理事長、報道機関、関係の家族や大学の関係者への感謝を述べた。

東洋医学大学は、その創立者の多大な努力によって 2004 年の 3 月に誕生した。それまで、東洋医学は当時ニカラグア市民の間ではほとんど知られていなかった。

2 ページ目以降には、2014 年の患者数は 4 万 7 千人でこれまでに 100 万人以上の患者が施術を受けたこと、また目が見えない視覚障害者にも 5 回目の卒業証書を出し、現在 6 回目、7 回目の指圧講座を行っていることにも触れています。

また、以前に送ってくれた 2012 年の「北米東洋医学誌」には、八巻さんのニカラグアでの活躍に至る経過について次のような手記が載っていました。

——東洋医学を学んでいた学生時代、按摩の課外授業を受けた記憶があり、そのときの講師は筑波大学の教員養成課程を出られた全盲の栗原勝美先生でした。初めて全盲の先生に接し、驚きと感銘を受け圧倒されました。筋肉とか神経などの解剖知識などはすべてそらんじる学識、しかも掃除、洗濯、料理等一人で何でもこなしてしまう先生の生きざまを知り、世の中にはなんと稀有なお人がいるのだらうと自分を顧みる機会をいただいたのです。数カ月の短い期間でしたが先生からは感動をいただき、いつの日か先生に何がしらの恩返しをしたいと心の奥に秘めたのです。

2009 年に大学の第 1 期生を世に送り出すことができ、その 1 期生に講師を依頼し、視覚障害者に指圧按摩を教授し社会参加を試みる、というプロジェクトが始まったのです。恩返しを心に秘めてより 30 年後のことでした。

人口約 600 万人のニカラグアには約 7000 人の視覚障害者がいると言われていますが、政府は正確な数を把握していません。障害者を統括する政府機関が存在していないのです。国そのものが貧困なため、障害者に対する政策は最後の最後というのが現状です。

地方に行けばいくほど視覚障害者がいるのですが、家族は世間体を気にするのか家の中に閉じ込め外には出さないのです。そのような悲惨な状況を、なんとか東洋医学の手技療法を学ぶことによって打開して、視覚障害者のお一人お一人が新しい人生を開いていってほしいという願いのもとでのプロジェクトです。

すべて手探りから始まりました。講座は 2 年のコースで初年次は解剖生理学といった基礎医学と実技を学び、2 年次は患者を実際に治療するというもので、これまでに 5 回卒業式

を行い現在48名の視覚障害者が誇りを持って働いています。

2回目の講座からは、JICA（国際協力機構）を通して、視覚障害者教育30年の経験を持つ全盲の講師に日本から来ていただき、さらに充実した内容の教育を行っており、現在は全盲の指導者も養成しています。

今回、視覚障害者の教育を行う教師を含めたベッド数15の指圧センターが日本国大使館の草の根無償援助の助成を受け堂々の完成を見ました。東洋医学による視覚障害者への大きな貢献がニカラグア社会にインパクトを与え、大きな感動を呼び起こしております。

2012年3月、第4回目の卒業式、3回目の視覚障害者講座修了式、指圧センター開所式を大学敷地内で執り行うことができました。これで一般学生の卒業生の数は50名を超えました。数こそ多くはありませんが、ニカラグア各地での活躍はマスコミにたびたび取り上げられています。

卒業式には日本大使と共に国会議長がお祝いに駆けつけてくださり、花を添えていただきました。演壇で卒業生一人一人に卒業証書を手渡してくれたのです。東洋医学を国会が、厚生省が、日本大使館が進んで応援してくれているのです。

課題であった卒業時に得られる「東洋自然医学学士」というタイトルは、本年大学審議会から「東洋医師」と名乗ってもよいという許可もいただき、今やニカラグアに東洋医学の大きな砦を築きあげることができたのです。

先般、もぐさアフリカプロジェクトの件を全学生に紹介したところ「東洋医学をもってアフリカの方々に協力したい」という学生が何人も出ました。ニカラグアで東洋医学を学んだ若き丈夫達がアフリカ、中米そして南米へと活躍する日が来るのもそんなに遠くではないと確信します。

ニカラグアに赴任当初、「鍼を使う東洋の魔術師」と新聞に書かれてから25年が過ぎました。ここに至るまで本当にたくさんの皆様からの温かい激励と熱い真心をいただき、その結晶として東洋医学がニカラグアの大地にしっかりと根付きました。東洋医学の見果てぬ夢は、ニカラグアから更に世界へと広がっていくようです。

——八巻さんは創価大学の2期生。幾多の苦難を越え、夢を現実にし、ニカラグアでも最も著名な東洋人になりました。そんな八巻さんの体験を創価学会の機関紙・聖教新聞（平成22年8月8日付）でも紹介しています。その記事から概要を抜粋しますと——

中米ニカラグアの国土は日本の約3分の1。平均気温は25度。長引いた内戦の影響で、国民一人当たりのGDP（国内総生産）は1122ドル。日本の約30分の1で、中南米の最貧国の一つとされる。

八巻さんは東洋医学の大家である父の影響で医学部の受験に挑むも2度失敗。医学の道をあきらめ、72年、創価大学2期生として門をくぐった。卒業後はブラインド製造の会社へ。トップの営業成績を残していたが、東洋医学への思いが断ち切れず4年で退職、鍼灸の専門学校へと進んだ。はり師、きゅう師の国家資格を取得すると、都内の病院に勤務。専門学校で知り合った女性と結婚し二人の子供にも恵まれた。

「そろそろ二人で独立開業しよう」——そんな話をしていた矢先、「ニカラグアの内戦で傷ついた人々を救おう！鍼灸ボランティアを募集」との新聞記事に心を奪われた。

当時、ニカラグアがどこにあるかも分からなかった。スペイン語も話せない。“それでも、

戦争で苦しむ人々に、自分の技術が役立つなら”と決意し、87年、2歳と1歳の幼子を抱えニカラグアへ渡った。そして同国の第2の都市レオンでクリニックを開設、辞書を片手に片言のスペイン語とジェスチャーで患者に対応した。治療技術は評判を呼び、口コミで瞬く間に患者が増えた。

施設と道具に多額の費用がかからない東洋医学は、発展途上国の医療に適していると思った。“ならば、ここで鍼灸師を育成しよう”。そこで東洋医学講座をスタート。翌年には講座を受けたニカラグア人による初の鍼灸クリニックが開設された。そのニュースは国内全土をめぐり、各地から講座の開講の要望が相次いだ。

八巻さんは僻地まで足を運んだ。乗り合いのトラックで舗装されていない道路を進むと、着いたころには体中が砂ぼこりにまみれていた。97年には首都マナグアへ拠点を移動。夫妻で設立したNGOも現地法人となった。このころ、八巻さんの各地での活躍を目にした保健省から「東洋医学を国の正式な医療の一つにしたい」との打診を受けた。協定書に調印、大学の創立を本格的に考えるようになった。

とはいえ大学創立となると、越えるべき試練の次元が異なっていた。政府等の援助が決定し、資金の目途はついて、厳正な審査を行うニカラグア大学審議会を通過するのが難関だった。膨大な資料の提出を繰り返したが、なかなか認可がおりない。突破口となったのは、これまで診察してきた患者の署名活動だった。

人口600万人のニカラグアで相当数の国民を診療してきた八巻夫妻に対する患者の信頼は絶大だった。

「私たちは、八巻夫妻によって助けられたのです!」。市民の切なる願いが大学審議会へと届き、2002年に正式認可がおりた。そして2004年3月、首都マナグアに中南米で初めての東洋医学専門の学府「日本ニカラグア東洋医学大学」が創立されたのだった。この模様は、日本のNHKでも特集が組まれ放映された。

以上が記事の概要ですが、実は私が聖教新聞のパナマ特派員だったとき何回かニカラグアを訪問し八巻さんとも懇談したことがありました。立ち上げたばかりの診療所も案内していただいた。東洋の医療事情や文化そのものがあまり伝わっていなかった国で新しいことを広めていくことの難しさや困難を目の当たりにもしました。そんな事情からこのメールは私にとってもことさらうれしいニュースだったのです。初志を貫徹した八巻さんの姿に、どこにあっても、どんな立場にあっても、志と挑戦のあるところに道は開けてくる、という例をご紹介します次第です。